

序言

『言語と文明』第18巻が刊行の運びとなりました。今回は、2019年7月1日に逝去された故梅田博之先生を追悼する特別寄稿を掲載しました。研究論文にも、梅田先生が指導された修了生による論文が掲載されています。

梅田先生は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所所長を退任後、1996年4月に麗澤大学に赴任され、1996年4月から2001年3月まで言語教育研究科長(初代)、2003年4月から2007年3月まで学長(第4代)を務められました。

先生は、日本の韓国語研究の第一人者であるとともに、教育(NHK テレビ「안녕하십니까? ハングル講座」初代講師ほか)、社会活動(日本学術会議専門委員、日本言語学会会長など)の面でも多大な貢献をされました。1970年代には、NHK ラジオ国際放送(韓国向け)日本語講座講師も担当されています。(先生の略歴と主要業績は『言語研究』156号(日本言語学会)に掲載されています。)

『言語と文明』第5巻(2007年)に掲載された先生のエッセイ「大学院開設の頃」には、次のように書かれています。

日本語を人間言語のひとつとして捉え、普遍的な言語理論に基づき、学習者の母語を理解し、日本語との対照研究によって相違点を明らかにし、且つ文化的背景の理解の上に立って、日本語教育に当たる人材の育成を目的とする教育課程が作られ、研究に際しては、フィールドワークを重視するとともに情報処理の手法も大いに活用するという構想であった。(略)当然、この専攻においては、言語学、個別言語の言語学的研究、対照研究、日本語教育論、文化論等のすべてが研究対象となり、多くの多彩な研究が論文のテーマとなった。だから、通例の日本語教育専攻とは一味もふた味も違った特徴のある研究科、専攻を目指したのであった。

日本語教育および言語教育研究科をとりまく状況は当時とは大きく異なりますが、さまざまな領域の研究者・学生が集まるという伝統は大切にしたいと思います。

2020年(令和2年)3月

言語教育研究科長 井 上 優